

口

【フリートーキング】

文化ボランティア・コーディネーター 大久保邦子氏
うきは市立江南小学校 校長 糸井 茂氏
司 会 船木 孝子氏

※ここで出てくるお名前のご紹介

事例報告者への質問 桑野さん : 弥栄神楽座
岩崎さん : バンブークラブ

会場から（参加者） : 神社の神職の方にお聞きしますが、名前の由来についてお伺いします。

私の生まれが昔の嘉穂郡稲築町山田で、山田は今の同じ嘉麻市ですが、山田にも神楽がありますでしょう、案外有名な、あれとは何か関係がありますか。

桑野さん : 山田の神楽とは直接関係はありません。今はその団体と私どもの団体との交流会のようなものをしてと思っています。

神楽の名前は、力のある言葉を使いたいと思っておりまして、日本の中で最高だと思うのが弥栄だと思いましたので「弥栄神楽」を使わせていただいております。

糸井さん : 創作神楽という新たに創り上げられているということだったのですが、伝統的なずーと続いている神楽というのもあるのですか？

桑野さん : はい、一応ございます。

糸井さん : その子細を、新しい神楽を創るときに、伝統神楽をどう取り込むか、大切にしているか、工夫を教えてください。

桑野さん : 伝統神楽と言いますと、私たちの地域では嘉穂神楽というのがあります。

嘉穂神楽は、元々地域の神主が中心となって皆で協力してやっていく神楽でした。しかしそれでは、伝承することに難しさがあります。地域の人の協力が必要だということで、それぞれで神楽を、現在 4 地区、別府神楽・土師神楽・庄内・碓氷と 4 ケ所で各神楽を伝えております。山田の地域には、嘉穂神楽が何故か伝わっていません。

伝えたいなーとっていて、まず、嘉穂神楽を伝承しようと努力はしましたが、なかなか思うようにいなくて、そこで立ち上げたのが弥栄神楽座です。

神様をとおして私たちが楽しむ、神様にも楽しんでもらうというのが本質です。

そこだけは神様は何処にいるのか、あとは五行思想とか、そういったところも、風水とか大切にしながら神楽を創っていくようにしていますが、そんなに関係性が必要でない神楽というのもあるので、娯楽として楽しめるような神楽も創っています。

糸井さん : 更にお聞きしたいことがあります。どこに感銘したかと言うと、桑野さんに魅力があってあれだけの方が集まったんだと思いますが、沢山の方が関わっておられて、新しい神楽を創ろうという考え方、裏方の衣装の方々とかプロフェッショナルの方も、その方々をどうやって纏められたのか、集められたのか、と言うことを教えてください。

桑野さん : まず、核となる人を探しました。後は舞を創る人がいないか、舞はどんな人がいいかなと探して、その方とか他の人にも声を掛けました。いろんな方が関わりを持つと、衣装が出来る人がいないね、と話をすると、「あーいい人がいるよ、福岡に」と名前が上がります。

口

まず、1回挨拶に行って「こんな神楽を創りたいです」と、思いのたけをぶつけます。ぶつけてそれに賛同してくれたからこそ今も続いている感じで、本来ならば莫大な費用がかかるわけです。

費用などは、材料費とほんの少しのデザイン料、交通費もほとんど請求されない方です。デザインをする方は太宰府、都府楼に住んでいらっしゃいます。米の山峠を越えて1時間くらいかけてわざわざタクシーで、夜遅く帰るようなそういったことなどをなさっています。やはり、人と繋がるということが大事で、楽しみや喜び、人が喜ぶことが自分の喜びかと感じる、自身でもよく分からないですが、そこらへんかなーと思っております。

大久保さん：聞き終わって、糸井さんと開口一番、二人で「凄かったですね〜！」

田中さんがこのフォーラムを企画されたねらいがよ〜く分かりました、はめられた（笑）という感じで、びっくりしました。

確かに、万葉、梅の花という・・・、太宰府の雰囲気でも良かったですね。

2つのまちづくり、文化でまちづくり、凄いですね。質問したいことが幾つかあります。

まずバンブーの方、あれはとても良かったです。私は今、都内で文化ボランティアの助成事業の審査委員をしていて、管弦楽などのコンサートはよく出かけていますが、バンブーのオーケストラは初めてです。竹のオーケストラは音が柔らかいですね。引き込まれました。

質問の1つ目は、こういうバンブーのオーケストラは他にもあるのかどうか。2つ目は岩崎さんが文化協会の会員になられてから、ここまで来るのに何年くらいかかったのか。いろいろやろうとしても、実際に地域づくり・まちづくりをやっていくには時間がかかるのですよね。

次に、弥栄神楽の音にはびっくりです。実は今私、埼玉に住んでいます。埼玉はかつては神楽が非常に盛んなところなんです。息子や夫がそういうのが好きで、ネットで調べて神楽の発表・演奏があるとわかると、車で1〜2時間かけて、埼玉の奥の秩父地方に行きます。ネットでお知らせが流れるので、大勢の人が押しかけてくると思うのですが、尋ねて行きますと、椅子が20〜30個置いてあるのですが、観客席には私と夫と息子と3人だけでした。

やっている神楽は、伝統芸能かどうかよくわからないのですが、先ほどの皆さんの公演みたいな楽しそうなものじゃない。衣装やお面なども古い物をやっとのことで引っ張り出してきたようなのです。「同じようなお面が小屋にありますよ」といわれて、見せてもらったのですが・・・。

伝統を持ちこたえようと地域のご老人たちが集まって一生懸命やってる、という感じでした。

先ほどの発表を見ていて、「わ〜凄いな〜！」と感じましたが、やはり、どこか伝統にこだわってらっしゃるみたいですね。私、それにこだわらなくて、歌舞伎座だって、何だって、新しいものどんどんやってらっしゃる。伝統というのは、過去のものにこだわる必要はないな、と思いつつ見ていました。これはまだ伝統になっていなくてこれからなるのかな、と楽しみながら拝見していました。

もう一つ不思議だったのは、結構費用が掛かりますでしょ！これはどういうふうに会計処理されているのかなと思いました。とても感心したのは、やり始めて5年ですよ、失礼ですがおいくつですか？聞いてもいいのかな。こんなこと。

桑野さん：43才です。

大久保さん：わ〜凄いですね〜！ 何でこんな事を思いつかれたかというのを、聞きたいな

口

と思うし、5年のところでこういう活動をきちんと継承されているし、未来に伸びる可能性があるな、これを見るためにまた来たいと思うし、とても素晴らしいと思いました。

こちら（岩崎さんへ）お年を聞いていいのかな。

岩崎さん：私、90才です。（館内でわあーと驚きの声）

先程お尋ねの、「他にもあるのか」ということですが、プロの集団としては東京に東京楽竹団というのがあります。私ども年1回、那珂川市は毎年8月に東京楽竹団を呼んでイベントを開催しております。九州では松浦とか八女の方にもありました。今活動しているのは佐賀の吉野ヶ里に吉野ヶ里バンブーというのがあります。こちらが私ども那珂川より10年程早い、私どもの方が約15年やっております。文化協会には、今も名誉会長として残っておりますが、だいたい15～16年携わってきております。

大久保さん：こういうまちづくりを、まちづくりというのは、非常に地域が疲弊していますからね、どこもね。限界集落というのかな、文化でまちづくりをするというのは非常に根気のいる仕事だと思うし、中心になって引っ張っていく人に理念みたいなものがないとだめだろうなと思うし、お二人に感激してまた、会いに来たいなと思いました。

桑野さん：予算は“おあし”（お包み）としてお気持ちを皆さんから頂いております。

自家（うち）のお宮は階段が高いので階段を登ったところに受付を用意していますので、そこに皆さんが少しずつ奉納していただいたものがメインです。

それと、年間を通していろいろ出演依頼があります。その時の謝礼を当てています。

ほとんど生活費で、だいたい毎年100万円超えるぐらいですが、そういった奉納とイベントの収入で全部無くなってしまうような状態です。

あと、最初の頃、舞台がありませんでしたので、拝殿の場所を使っていました。

舞台がないと、神楽に入って向こう側が大変暗くなりますので、明るい舞台を造って欲しいと希望して舞台を造ってもらいました。そう言った無茶な願いを聞いてもらって何とかやっている状態です。

大久保さん：先ほど言い忘れたことで、ちょっと断っておきたいことがあります。

私の原稿の中にネットワークキング、ネットワークということを書いています、活動すればするほどネットワークというのが大事だなあと思って書いています。

それと情報は力のもとで、情報がないと動けない、この2つはとても大事にしています。

実は私、九州国立博物館ができるというので、先ほど言ったように100年ぶりに国博が出来るというので、「わあー、どうなるのかな」と思ったときに繋がったのが、実はボランティアの佐藤敏子さんです。“居る？佐藤さんは何処に！”

私はこの頃、ボランティア通信というボランティア通信を作っていました。

名称が面白くないので、その時ベジタリアンとかなんとかに引っ掛けて“ボランティア通信”というのをを出していました。私は、国立女性教育会館の情報図書室のボランティアをしながら、いろんな情報を発信してきました。それを読んでくださったのがボランティアの佐藤敏子さんでした。

佐藤さんがその通信を読んでいただき、この九博に繋げてくださった、と言う事です。

さらに、その佐藤さんが糸井さんに繋げてくださった。このように1本の糸が繋がって、ほん

口

とうに思いがけない広がりになり成果をあげることとなりました。

ここまで話すと、糸井さんをちょっと紹介しないといけませんね。

もう分かってらっしゃると思いますけど、こういう人というのは珍しいです。糸井さんがこの活動に関わり始めてボランティア導入の状況が動き始めました。国立の博物館を創るという・・・それは初めての事ですから、その準備室の九博の職員の人たちもどう動いていいか分からなかったんだろうと思います。

九博が出来る、なかなか動かないなーと思ったところにこういう人が飛び込んできたという感じでした。

糸井さんという人は、型破りな人です。

どう型破りかと言うと、非常に印象的なことを覚えております。いろんなところに打ち合わせに行きますが、九博ボランティア導入の打ち合わせをした時のことです。その時、北九州市でも講座があり、糸井さんが、「僕が北九州市まで車で送りますよ」と言われて、福岡空港からそこまでの運転しながら、ボランティア募集約半年間のいろいろな状況、どういう人が応募しているとかいろんな情報を話してくださいました。

そんな話を聞きながら、「なるほど、ボランティア志願者にはいろんな優秀な大勢の人が居るのだ」ということが、凄くよく伝わってきました。

当然その会場に着いたら、資料を基にして説明があるのかなと思っていたら、1時間ぐらいのドライブをして会場の前に着いて私が降りたら、「あっ、じゃ、バイバイ」と去ってしまわれたのです。びっくりしました。

行政の人でそういうやりかたをするのは初めてだったので、糸井さんってすごい人だな～！と思いました、形にとらわれない人です。

それからもう一つの話も車の中での話ですが、糸井さんは小学校の先生からいきなりこういう行政の中に飛び込んでこられた方です。別世界ですよ。将来何になりたいですか、とお聞きしたら、14、5年前の話ですが、その時におっしゃったのは、「僕は小学校の校長になりたい」と、きっぱりとそれだけおっしゃったのです。小学校の校長先生って大変な仕事ですよ。でもはっきりと

「僕は小学校の校長先生になりたい」とおっしゃったのです。

実際になられて、先ほどの報告にあったようにいろいろ実践されていたので、あの時のことを思い出し、紹介させていただきました。

糸井さん： モンスターペアレント、これはいいですよ。学校に興味・関心があるから、文句を言うんですね、だから裏を返せば応援団なんです。私も数々やられました。いまは応援団として支えていただいています。その、秘訣としてはまず、聞くことですね。相手の思いをすべて聞くことなんです。そして次に初めて授業にのれる、ケースバイケースで一人ひとり違います。そこを思い悩んだら病気になります。これは子供たちもそうなんです、一人ひとり違うんですよ、問題構造が。ボランティア活動もそうなのかなあ、いろんな方々がいっぱい集まる中で組織としてみんなでチームワークを良くしようとした時は相手を理解すること、それがさらに、パワーアップするのかなと。

きょうは3つの団体の方が発表されて凄いな、と思ったのはパワーをえらく感じるからですね、3つの団体の、今まで私も見たことのない文化ボランティアの皆さん方かなあと思いました。

口

ここで素朴な質問で、松尾さんに質問させていただきます。

今日、素晴らしい万葉の歌を聞かせていただいて、うちの学校も4年生が万葉の歌に一生懸命取り組んでやっているところです。小学校とか中学校にも出向かれて、そういった歌の活動をされるのかどうかをお聞きます。

松尾さん： 只今、太宰府中学校では10年以上万葉についてお話をし、文化祭の時に子どもさん20名くらいが発表するような勉強会を致しております。小学校では10年くらい前からですが校長先生のご意見で毎年「万葉かるた会」とか確かによくさせていただいています。ところが校長先生・教頭先生が替わられますと、あまり興味をお持ちじゃなかったら完全に止まってしまう。ただいまは太宰府市の学校では毎年文化祭で続いております。

糸井さん： ありがとうございます。私は来年度で今の学校は退職しますので、来年度、もしうきは市に来ていただけるのなら。

松尾さん： それは時間があれば、うきは市の方の歌がございましたら、そういう太宰府の歌とやっぱり九州の歌を使って交流といいますか、もっとも、歌と言いますのは心が詠まれていますので、できますよ。

子供たちが仲良くする、とか優しい心になるというのは万葉の歌の中から伝わって来ていると思うんです。明日は壱岐の島に一泊で行って参ります。

船木さん： 先程、小学校で校長、教頭が替わると途絶えてしまうという現実があるというお話でしたけども、その辺はどのようにしたら宜しいでしょうか。

糸井さん： やっぱり変わりますよ。1年では変わらないですが、校長が子供たちや地域や自分のことを考えて、新しいことを打ち出したり、学校現場はスクラップ&ビルドです。

私は地域のボランティアさんと関わりがあり、消すことも考えて、昨日も実は花植えボランティアさんに来ていただいて、この活動も来年度は見直しの対象になっていますとか、学校として腹を割って話すと、やはり、残してほしいという熱意が伝わったので・・・、残るでしょうね。そういう熱意を持って関わっていただいたら良いと思います。

校長が替わると、学校が変わる、良くも悪くも変わるのかなと、それが学校のシステムです。

松尾さん： 太宰府中学校だけは校長先生の引継ぎ、毎年の行事で引継いで学校行事の中に入れていただいています。13年か14年毎年続いております。太宰府中学校だけはですね。他のところはまだそういう授業は頂いてないですね。

宗像歴史観光ボランティア船村と申します。

素晴らしいバンブーオーケストラ、初めて聞きました。質問ですけど、演奏者は皆さん楽器経験者ですか。

岩崎さん： ほとんど経験はありません。今、指導に来ていただいている先生はフルートの元、日本フルート協会福岡支部長、東京の出身の方ですけど那珂川の稲員とって、過疎地域になりかけたところ、そこには他の芸術家の方も移り住んでおられるところですが、そこに住んでおられます。その先生は、自分も市にお世話になるから、何かお手伝いしたいという気持ちで一生懸命取り組んでいただいています。

いま1つは選曲をする人、音楽大学を出た方で教室を開いておられます。その方が一生懸命選曲に携わっておられます。人材には、非常に恵まれています。

あと1つは、子どもたちも若い人も興味を持ってもらってワークショップをしてる、一番前で

口

椅子に座って叩いていた楽器というのは、非常に簡単で、子どもでも作れます。そういう物をワークショップで子どもたちに作らせて、それに参加した子どもや作った子どもと一緒に夏の「竹の里フェスタ」の舞台に乗せて演奏させたりしています。そういうことで直ぐにでも参加できるような楽器です。

竹の音そのものが非常に広がりがあるため、下手な人も上手な人も一緒になって演奏すれば、自然と音が集まってくる、というようなことです。

佐藤敏子さん：バンブーをやっているところが他にありますか、という話しでしたが、私の知っている限りでは、県のアンビシャス運動の一環として、小郡市の子どもたちを中心にしたバンブーオーケストラがこの近くではございます。子どもさんが実施されています。

私の質問是那珂川市の岩崎さんです。

バンブーオーケストラが活動の発端であるということですが、その後、竹を使ったまちづくりというふうに進展させておられますね。竹を使った竹灯籠から、それを利用した竹炭から竹細工へというふうに、こういう発想と言いますか、これは凄いな一と思って、バンブーだけだったら30人居ればすむことでしょうか、その先がどんどん進んで竹炭名人が登場してみたり、竹細工名人が登場したりというふうな、こういう繋がり方をどのようにして進められていかれたのか、実は私たちも触発されていますが、高齢化が進んでおりまして、新しく事業が拡大していかない、という悩みの中にいますので、ご助言いただけたらと思います。

岩崎さん：ありがとうございます。那珂川市は古くから竹を家庭用の生活用具として作ってきたという歴史があって、古老の方々にその作業が大変上手な方がおられ、また興味を持った方がおられ、その方々からまずは竹の知識を授かりながら、使い方から教えてもらいながらバンブーオーケストラを創ったといういきさつがあります。

その方々も今は亡くなられましたが、そんな技術などを継承することが出来ました。

そして、竹に関する広がりですが、演奏者はほとんど竹山に入ることは敬遠をされます。だけどそこに男が何人か入ると一瞬に竹切り作業に加わりながら共同でやって行ける、そして行政も入ってまいりますし、そういう仲間が集まる中から、せっかく切り出したんだからなにかこういう物に使えないかというようなアイディアを出してもらえる。

すると、「それをやってみよう」と、直ぐに飛びつく連中が何人かおりますので、“やろう！”ということの意思統一は非常に早く出来るんです。あと、一番大事にしているのは地域の方々ができるだけ参加をしてもらいたいということで、地域に説明して合意を取付ける。

これは大切にしている中で一番困難なものであります。

確かに、その、竹炭づくりでもやりたいという方が出たときは、その方が、古くからされてきた方の技術を教わりながら、楽器目的に参加された方も、今は一緒にやっています。

その方はキャンピングカーを持っていて、山の中ですけど、キャンピングカーの中で寝泊まりしながらで・・・、そのくらいの情熱を持ってやらないと、なかなか取り組みは出来ません。

竹藪というのは人が寄り付けないような状況に今はなっています。

この状況が最近の災害の中でも言われているように、土砂災害の大きな原因になっています。

その竹だけを切る目的のボランティアを募集しても、なかなか集まりません。

事業を広げて行く中から皆で共同して出来るような体制を創っていくのが大事です。

竹細工にしても、竹山の中には孟宗竹もあり、真竹もあり、色々混ざっています。

口

孟宗竹は、筍掘りという楽しみがございます。真竹については色々工作、工芸品によく使われます。上質な真竹は、節が非常に長く真っ直ぐに立っているのが特徴で、今までは燃やしていたものを何とか使いたいということから切り出しています。

私どもは、行政の方に助成金のお願いは致しません。まず、自分たちでやってみて、何年かやってみて、本当に、これは地域のためにやっているんだなあという評価をしていただいたときに助成金を出してもらっています。行政からはいろいろな助成金の情報を私どもは得やすい立場にあり、その辺の活用をしています。申請をして、実施をして結果を評価して報告することを、ボランティアの中からできるようにならないといけないと考えております。そういうところから、活動の広がりにつながっているのが現状です。

船木さん： はい、ありがとうございます。地域の協力や関連事業を進めることが高齢化の対応にもなっているというお話がございました。また、災害の問題もあるということがございました。その辺はいかがでしょうか。

大久保さん： 田中さんに伺いたいことが一つあります。本当に感激しました。発表が素晴らしかった。文化ボランティアというのは、まち起こしに繋がっていてしかも楽しみながら、こういう活動を今回入れてくださって感謝します。

どうやってこれを探したのかお尋ねします。もう一つは、万葉は結構有名だったらしいですね。バンブーとこちらの神楽、今日、初めて知ったという方。（会場に問いかけ）ほーら、ほとんど知らなかったということですよ。ということは地域でもあまり知られてなかった訳ですね。なおさら、どういうことで探されたのか、お尋ねします。

田中代表： 県に企画振興部というところがありまして、そこに今朝お話ししたような趣旨を伝えて「どこかいいところを教えてください」とお願いしました。県が把握しているまちおこし団体の名簿があって、それを見せていただきました。この名簿は、簡単にはいただけるものかどうか、個人情報ですからね、問題があるとは思いましたが・・・。

その中からこれは面白そうだなと、面白いと言ったら失礼ですが、皆さんに知っていただく価値があると感じたから、今日ご一緒していただくようお願いをしたところです。

令和の関係は、以前から存じ上げていました。

皆さん、一つ返事で了解していただいたということです。

糸井さん： 私が博物館にいる時の話ですが北側に竹藪があるのをご存知ですか。あそこが火事になって、すごい恐怖になったことがありました。

行政に「綺麗にしてください」とお願いするんですが、どこも引き受け手がありませんでした。

理由は、絡み合っているから危ない、切ると反動で怪我をするからしません、と言われる。

当時の知事さんは、来るたびに「景観が悪い」といわれるんですね。

そこで、どうしたかという、私の上司がいまして、

「おい、糸井君、明日体操服を着てこい、俺はチェーンソーを借りてくる」と言われ、チェーンソーを借りに社会福祉センターに行かれて、切られました。

曲がっている竹を、上司は綺麗に全部刈られました。

次に知事が来られた時に、「おー頑張ったね」と、お褒めをいただきました。

口

会場から : 「手伝いました」と、声があがりました。

糸井さん : 竹の話をしたら思い出すのですが、中に入る人が少なくなってくると、竹林が荒れていきます。竹って保水力がないので、大雨になった時に流れやすいんです。そこを問題意識、これは全国的问题だと思いましたが、どうやって解決するかと言ったときに、解決する手立ては多分ないと思うんです。

ただ一つあるとすれば、岩崎さんたちがやっているようなノウハウをお持ちなので、それが全国的に広がれば一つの手立てになるのかな、と思ってお聞きしていました。

船木さん : 岩崎さん、何かございますか。

岩崎さん : 確かに災害で、広島の場合は竹林が相当影響しました。朝倉の方でもです。

地下茎が非常に浅いというのが特徴で、横に根が張って、どうしても土砂崩れには弱いということです。私どものやり方をご紹介しますと、予算は手出しはせずに、今、農林事務所の方で管理されている地域環境税というのがございます、そこから助成金をいただいて森林の整備という名目でやっております。竹は、切っても切っても、竹の子がすぐ生えますので、そこを放置しますと4～5年したら基に戻ってしまう状況で、いたちごっこです。確かに他に打つ手はないような状況です。

船木さん : 打つ手がないということになってしまいました。

大久保さん : ボランティア活動というのは後継者の問題がでできますね。

3つの活動事例の方々に後継者に関しては考えた事があるのか、それから人が育ちつつあるのか聞きたいと思いました。

船木さん : それでは、桑野さんからお願いできますか。

桑野さん : 桑野です。後継者の問題は既に活動を始めた時から考えていまして、実は射手引神社にも獅子舞があり、それを観ていたのをそれを参考にさせていただいてやっています。

2年後ぐらいから、子どもを入れた神楽を主催しています。

子どもが入ると親御さんも付いて来て喜ぶということで、子どもさんが神楽を奉納する時は、孫の顔見たさにおじいちゃん、おばあちゃんも来るというような形で観客も増えますし、世代の循環が出来るということで、子ども神楽も創っております。

それだけでは、なかなか難しいので、子どもたちが楽しめるようなことを神楽じゃない方法でやるとか、大人も勿論、事あるごとに、今、ラインの時代ですのでラインで、「今日も飲めるよ」という感じで集まってもらっています。

後継者ということでお話にもありましたが、小学校の授業にも行っています。ワークショップということで地元の小学校に神楽授業を行っています。他には、地元の小学校で伝承されている相撲体操というのがございまして、その相撲体操を神楽に取り入れて一緒に継承するような形もやっています。その中で協力し合いながら伝承をしていこうとしております。

岩崎さん : 私どもバンブーについても、学校のワークショップなどに取り組みとかございます。竹炭についても、なかなか子どもたちが参加することというのは、例えば、竹炭を作る時は竹をそのまま、節が入った長いままで燃やすと破裂しますので割って、花とか硝酸とかを入れて焼くという楽しみがございます。そういう形での参加をしてもらっています。

生け花の花瓶みたいなものも作れますし、それから壁掛けみたいなものも工芸品として作られ

口

ておりますので、そういう中から少しでも興味を持ってもらいたいと考えます。竹細工については、今、子育て世代の方が関心を持っておられて、お父さんなどは、幼稚園とかで作ったものがうまく出来た、と自慢話をしておられます。この辺、私は期待をしております。

また、後継者の指導ができるように技術の習得のための研修などをプロの講師の方に来ていただいてやっている最中です。竹を切るということについては、これは地元の人の協力がないと出来ませんし、それを切ることによって活動を継承していく、保存をしていくという発想の方に繋げて行っておりますので、地元の人の積極的な参加をどういうふうに促していくかに、非常に気を使いながらやっているところです。

船木さん：ありがとうございます。それでは、松尾さんお願い致します。

松尾さん： 私たちの場合は万葉の勉強会をしています。特殊じゃないかと思いますが、勉強会には沢山の方が参加されます。やはり万葉、特に太宰府の万葉については特徴がございます。今日みたいな行事でいろいろな手作りの衣装を着て活動しています。

私たち、今日発表した者は80才が3人で、あとのメンバーはそれに近い状態です。

後継者と言いますと、中学校に行って毎年そういうお話をしたり、学校でも理解してくださっていますけど、いろんな行事の中に参加できるかということ、少し無理かと思えます。

丁度いい年頃のお父さん、お母さん方は孫ちゃんの教育、そして、親の面倒を見るとかそういう時代に差し掛かっていますので、難しいです。

後継者問題は、今からしっかり考えていかないといけないことだと思っております。

ここ最近盛り上がって私たち発表したりしていますので、詩を吟ずるようになって、ここ4、5年の間に、あ一万葉か、というふうに役所にも時々取り上げていただいています。

今回の令和の発表でも自分たち独自でやったような感じでございますので、これから先も勉強しながら、もう少し後継者の面も考えないといけないと思っております。

船木さん：ありがとうございます。各団体の特徴が出ていたかと思いますが、如何ですか。

今の後継者の問題に関して

大久保さん： 私は、河合隼雄さんが文化庁長官に就任された1992年に、第一回目の全国文化ボランティアフォーラムをやりました。その年の秋だったかな、その当時の担当者に条件をつけました。

それは、婦人教育会館は泊まれる施設ですから、河合さんに1泊2日ずーと付き合ってほしいと、条件を出しました。だいたい偉い人は最初来てちょこっと挨拶されたら帰ってしまわれるので、全部付き合ってほしいとお願いしました。

そうしましたら、河合さんは本当に最初から最後まで付き合ってくださいました。

そのフォーラムで行政や、公務員の悩みを聞く分科会を設けたところ、「行政職員は気が利かない」とかなんとかブーイングで、文句ばかりでてくるわけです。そうこうしている時に河合さんがその分科会に来られ、席に着かれた途端に行政の悪口が、一斉に長官に向けられました。小さな分科会で20人もいない場でしたが、そうしたら、河合さん、何とおっしゃったと思いますか？

ひとこと「どんな行政でもあるということが大事なんだ」と。その言葉をお聞きして、なぜか「なるほどなぁ」と思ったものです。

もう一つ。今、ガラス張りで有名な金沢21世紀美術館の副館長をされている方が、まだ準

口

備室段階でしたが、その方に来ていただいてお話をしてもらったとき、何と言われたかといいますと、

「金沢は、もう東京を相手にしていない、世界に向けて発信しようと思っています。」と言われたんです。

もう20年位前のことです。今や金沢21世紀美術館は世界に向けて発信していますよね。多分ここ福岡も東京よりも世界に発信してする事がいっぱいあると思います。

さらに彼が言った言葉は、“ボランティアが一番いい仕事出来る”と。

ボランティアは、やりたいからやる、大変だけれども結構それが成果を上げている。一番いい仕事をボランティアがしている・・・と言われました。

後継者の話ですが、活動は継続させる人が要るんです。だけど纏める人がいないと続かなくなる。

見ていると楽しんでらっしゃるみたいだから続くと思いますが、こちらバンブーの場合は行政が見てるから安心ですね、結構続くだろうと。こちらの場合は、楽しみはすごくあると思うし、まだ若い、まだ苦勞をいくらしたって大丈夫かなというのが感想です。

ただもっと、あらゆるところに発信する事が大事なかなと思います。県内くらいの人たちが見えてくれて評価をしてくれるでしょうけど、脚光を浴びると、やっている人にとっては非常に力になります。私、こういう素晴らしい活動は、もっと全国のいろんな人たちに紹介しないといけないなと感じています。

何時も、いろんなところを紹介してきましたが、いろんな所に講演に行ったついでに取材して記事にするということをやってきました。

これも一つのボランティア活動ですね。

バンブーコンサートは初めてで、あれが鳴り始めた途端、“わ～！”ととてもいい感じでした。是非、全国レベルで発信するとか、多くの人に見てもらおうということがとても大事なあとだと思います。その次の段階もやっぱり、評価をしてくれる人、見てもらう人を増やしていくことです。

岩崎さん：先ほどの説明を少し補足させていただきます。

実は8月31日に私どもは、竹林サミットというのを那珂川市で開催し、竹に関わる活動をされている団体を集めて情報交換をしています。その時に福岡大学工学部の佐藤研一先生が、竹イノベーション研究会というのを主催されていて、今、取り組んでおられるのは池の底に溜まったヘドロを除去するために竹のチップを使ってヘドロを固めて除去する方法です。

さらにそういうものから道路にチップが使えるようで、それは非常に弾力性があって吸収性が高いというお話をされて、そういう研究をしながら企業の方たちも沢山会議に集まっておられます。九州ではバンブーを1本50円とか100円で買い取って、粉碎する。

それから佐賀の入江さんという方が竹から、生鮮食品を保存する技術を開発され、従来は野菜を生産者から消費者に渡するには3日間程度だったのが、20日間に伸びたというお話をされております。おそらく今後、こういうものが商品化されていくと、大々的に竹の汚名を挽回していく使い方も出てくるだろうと思います。

悲観的なものだけではない、というお話をご紹介だけさせていただきました。

それから、バンブーの活用ですけど、終末医療の現場で既に真竹を使った癒し系の空間という

口

やつですね、これも私どもはこれからやっていかないといけない。バンパー持って、介護施設等を訪問して一人でも癒しの時間が提供できたら良いなという感じです。

大久保さん：　　どんどん広がりますね。

糸井さん：　　文化ボランティアだから後継者という課題がでてくるのかな、災害ボランティアだったら単独で行かれるから後継者の議論は起きないと思うんですよ。

次世代を巻きこむというのは非常にいい取組みで、子どもたちと保護者、ますます興味を持って少しでも関わっていただくと、後継者の課題がクリアできるのではと考えています。

これは課題としては大きいかなと思います。

次に発信力もたいせつで、うちの学校は全校で1300世帯くらい、毎月お便りをだしています。こんなボランティアがいますよ、こんな事を学校はしていただいて助かっていますよ、というのを出しています。

それから、毎月インターネットで学校から発信しています。発信というのは情報が届かないと相手は分からない。今日、素晴らしい3つの発表がありましたが、これも発信するということによって、確かに来た人が自分も関わってみたい、自分もやってみたい、自分も見たいという人が増えるとうまいくのかと、いろんなところでワークショップをされていますね、これも一つの大きな発信かなと、そこは柔軟力、相手に聞いていただきたいという柔軟力ですね。そこでマッチングして地道な活動が一つの発信としては大切なのかなあ、と思います。

船木さん：　　皆さまがワークショップをなさってらっしゃいますのも、地道に広げていくということも大切な発信に繋がるというお話しでした。それでは他にはございませんか、せっかくの機会ですから、ご意見や質問、ございませんか。

原田さん：　　とびうめの会の原田といいます。先程糸井先生が後継者の関連でなかなか難しいといわれた件ですが、確かに、災害、福祉は、全員そこに参加される皆さまと、きっかけというのは困っている人を助けたいと形がはっきりしていますが、文化の場合は、私たちは音楽関係の文化ボランティアですけど、参加される方はどういう意思で参加されているかは、ばらばらなんです。災害や福祉と比べたら、どうしてもそこら辺はちょっと弱いですね。現にそういった文化ボランティアに参加する方が少なくなっている現状がありますから、私たちとしたらもっと後に続く人たちも減らずに、できればもっと増えてもらいたいという気持ちがあります。今後文化ボランティアは、ボランティア像をどういうふうに理解したらいいか。そこらあたりのアドバイスが聞けたらと思いますのでよろしくお願いします。

糸井さん：　　答えられるかどうか分かりませんが、私、4つのカテゴリー、領域のボランティアの話をしましたよね。文化ボランティアというのは、専門的な知識やノウハウがあって、年間を通して関わってらっしゃる。それから尾畠さんの災害ボランティア、うちの学校のボランティア、それから、席を譲ったりなにか困った人をお手伝いするボランティア、あの4つのカテゴリーのなかで、私は自分が出来るのは文化ボランティア以外なんですよ、専門的な知識とか理解がありません。あの中では災害ボランティアを選んでしまうのかな、でも、文化ボランティアに参加しようと思ふ度にどうしたらいいかと考えます。私に言わせたら文化ボランティアさんというのは特殊なことをしてらっしゃるから知識が高いんですね、だから、入口をちょっと低くしていただきたい。入口を、あなたでもできるんですよ、というふうにちょっと低くしていただくと、私も参加して見てみようかな、初めの一步を踏み出すと、後は多分、

口

それぞれの魅力があるのでそのなかの虜になるのかな、と思っております。

やはり、最初の一步が非常に大切なのかなあと思います。

大久保さん：私の言っていることが伝わっていなかったのかしら？文化ボランティアと言うのは、優秀というより、文化の捉え方で、生活全部が文化だと思っていますので、どこの部分でどう関わるかということが大事であって、文化ボランティアは敷居が高いとかいう発想が、ちょっと違うのではないかと思います。

後継者がいますかとか、いなかったら潰れたっていいと思っています。行政というのは潰れたら地域がダメになるから潰れたら困るわけですね、だから、色々あっても後継者が要るわけです。だけど、文化とかボランティアは、ものすごく大事だよ楽しいよと皆が集まって来てやるようになって欲しいと思いますし、楽しそうな良い活動をされているから、是非もっと続けてほしいという思いがあって、それを売りにして欲しいと思います。

この弥栄神楽座、埼玉県的神楽を見ている私にとってほんとに眩しいくらい素晴らしいエネルギーな演技だったし、バンブーはかなり事業化も考えてらっしゃるでしょうし、やっている人が楽しそうだったじゃないですか、これ、ものすごく可能性があるし行政にとっても旨味があるな、と思ったから、これをキチンと皆で考えながらやっていく、慌てなくていいと思います。

岩崎さんは、結構、好きでほんとに長いこと地道にこの文化協会の委員もされながらここまできておられますよね、10年で、時間がかかればかかるほど熟成して地域にキチンと根付いたものであるなど、非常に希望を持ちました。この仕組みを、バンブーのこれは、発信していきたいですね。

それから、神楽、本当にいい演技、やっている人たちというのは動きも子どもから女性、いろんな若い人たちがいましたね。この人たち皆素人ですね、でも、やっている人たちを見てると、楽しいだろうなと思いました。

ボランティアは、金払ってもやりたい、授業料払ってもやるというのがボランティアの醍醐味というか、本当にやって楽しいという人たちは自費で行くわけですね。反対に、行政から言われて行くのはお金をもらっても嫌だなあと思うわけです。

本当にやりたい人は自前で行きます。

だから文化ボランティアは全然垣根はありません。

糸井さん：反論します。垣根とか言っていないけど、最初の1歩が私は大事だと思います。誰でもこの分野はやれるかどうか迷います。

最初の1歩をうまい具合に踏み出せる、神楽だったら神楽に、バンブーだったらバンブーに踏み出せる、それから万葉に、そういった形が取れると非常にいいのかなと思います。

踏み出してしまえばその人たちは良さが分かると思うんですよね。そういうことをしながら後継者を増やすという手法も大事じゃないかと思います。

大久保さん：後継者はどういう後継者か知らないけど、それなりに楽しむような人を育てていく。これもボランティアです。

それから、1つ思い出したことを言っときますけど、この九博ボランティア導入時に応募が852人とか言っていた。実際に研修を受けたのは750人くらいといってました。

応募者の資料をみせてもらって、びっくりしました。英検1級とか2級とかは目じゃないね、

口

フランス語や英語、ラテン語ができる人が何人かいましたね。レベルが凄いです。

その当時、糸井さんが言った言葉が忘れられません。

それは“1番大事なのは笑顔です”“笑顔のいい人を採りたい”と。え〜？ それって本気かしら？と思いましたが、それはとっても大事なかなと思いました。笑顔というのは人と話をすると相手に柔らかい思いを与える。ボランティアはほんとに笑顔ができる人がいい。それから、ある時、堀内正美さんって知ってますか、阪神淡路大震災の時に、俳優ですけど彼がボランティアをやり始めた頃、「ボランティアというのは何かが出来ないといけない思いがちですけど、笑顔ができればいいです」と話された記憶があります。たとえば、皆が働いているところに「黙って見てだけの老人がいても良い」とも話されたのです。黙って見てる人が、一つの目がそこにあるということがどれだけ大事かと。なるほどな〜？と思いました。あの人何してるの、なにもしないで、とよく言うじゃないですか。実は、動けなかったのかもしれませんが。

「あーそうか、誰でもボランティアができるんだな、なるほどなあ」と思いながら、ボランティアというのはやればやるほど面白いです。奥が深いですね。

今、国境なき医師団とか、いろんな専門職の弁護士がボランティアでやってますね。プロというのは責任感がある。責任感を果たさなかったら仕事やった楽しみ、充実感がないわけですよ。だからああいうの、皆、ボランティア、ボランティアと言いますが、ボランティアというのはその人自身に返ってくるもの、それがとっても大きいかなと思います。

船木さん： 会場の皆さん何か質問はありませんか。

大久保さん： アンケートを取ってできるだけレポートにする。良い事も反対意見もキチンと報告する事が大事です。自分たちの戒め、次に繋がります。

行政とは大変な仕事だろうと思いますが、裏表なくやっていくと絶対自信になると思います。

組織のなかの行政は大変でしょうが、やりたい事はやって欲しいと、私、思います。

県職員： 今回フォーラムに参加させていただいて感じたことを、この機会に先生とかにお聞きしたいと思います。今回、いろんな方、講師の方の発言であつたり、取り組みを聞いて感じたのは、活動の中に面白さやそれぞれの独自性というものを持たせて協力者を増やすということが、幅広く活動されるコツなのかなあと思いました。

最後に糸井先生に個人的に聞きたいと思ったのは教育現場の中でいろいろ老人会とかそういったボランティア活動が行われてると思うんですけど、僕の兄にも子どもがいて、丁度、今年度小学生になったのですが、PTA活動が始まるということで、PTA活動というのはボランティアが主体なのかなあ、共働き世帯が増えていく中で今後PTAの在り方とそういったものを教育現場でどう捉えているのかなと思って個人的な質問をさせていただきました。

糸井さん： 非常に厳しい条件があります。PTAの研修会も県が主催したり、いろんなところが主催します。高比良先生という先生がいらっしゃいます。昭和大学で初めて数学のテストをやられたすごいかたです。その方が言われた言葉で“組織は出来た時が最高で、それから退化する”と。それがずーと頭の中にあって、例えば私は九博ボランティアの第一期生を担当させていただいて、多分、そこが最高だったら後は退化するしかないですね。退化しないためには、やっぱり組織の中を変えていくこと、どう変えていくかは、それは、ボランティアさんと話し合いながらボランティアが活動し易いように変えてゆく、ということです。

口

今は共働が多く非常にPTA活動がしにくい。10年、20年、30年前の組織のままだっている。ここを変えない限り、PTAもきついのかなと思います。そこを誰が変えるか、会長と話し合いながら、学校も一緒に関わり合いながら変えて行く、やっぱり組織自体が退化しているのかな、と思います。実際に変えて上手くやっている学校はいっぱいあります。久留米にもあります。一人一役制度。一年に一回だけかわってください。学校のPTAに、そういうやりかたも実はあるのかな。現実的には会長が決まらない、役員が決まらない、いくつかの分野が10年、20年、からあるいろんな分野がそのまま残っているということです。実際は魅力的な学校です。

大久保さん：あなた（県庁職員）にお伝えしたいことがあります。私はいろんな講師の方をお呼びしてきました。4チャンネルでしばらく村尾信尚というキャスター、彼は元々大蔵省の主計課の方だったんです。

何でお呼びしたかというと彼が本を出したの、大蔵省の、どういうタイトルかという“役所は変わる、もしあなたが望むなら”という本を出された、彼は内側から中央官庁を変えていきたいと思ってそういう本を出したのね。私は面白い人だと思って講師に呼びました。

講師に対して質問が飛んだんです。

「そんな勝手な活動をして上司から何とか言われませんでしたか」

「さあーそうですね、ある上司が近寄って来て『村尾君、あの写真は良く撮れていたね』

そういうことしかコメントしなかった」

公務員だっていい事やっていれば大丈夫なんですよ。役所は変わる。もし、あなたも望んでいるなら！

自信を持ってやってください。